

高橋久一郎先生を送る

忽 那 敬 三

高橋久一郎先生（以下では敬愛をこめていつものように高橋さんと呼ばせていただきたい）が、本年3月をもって定年退職されるはこびとなった。

高橋さんが千葉大学文学部哲学講座に赴任されたのは1989年10月であるので、およそ30年間にわたり千葉大学で教鞭をとり、また哲学研究に傾注されていたことになる。私自身は1994年4月の教養部解体・文学部改組にともない教養部から文学部哲学講座に転籍したので、高橋さんとはかれこれ24年間を同じ講座の同僚として過ごしたことになる。この24年間も決して短くない期間であるが、私が高橋さんと最初に出会ったのはもっとずっと前の1974年10月の学部生時代のことであった。進学振り分けのあと学部2年後半から所属することになった専攻課程「ドイツの文化と社会」の1年先輩として高橋さんがいたのである。私を含めこの専攻課程の新入生（と言っても数名にすぎなかったが）を歓迎する会の二次会には多くの先輩諸氏が出席していたが、そこで異彩を放っていたのが瘦身の高橋さんであった。その席で多彩な話題を理路整然と展開する高橋さんに私は圧倒され、畏怖の念とともに専攻の選択を間違ったのではないかという後悔にも似た不安を強く感じたものであった。幸いその後私はドイツ哲学を、いっぽう高橋さんはギリシア哲学を専攻することになり、しかも同じ大学ではあるものの進学先の大学院が異なり、キャンパスも遠く離れていたため、直接会うこともほとんどなくなり、ずいぶんと気持ちが楽になったものであった。ただ、高橋さんの大学院時代の指導教官としてはギリシア哲学の碩学ではなく、近現代哲学を専門とする新進気鋭の研究者が割り振られ、それは高橋さんの関心範囲がギリシア哲学研究の枠には収まりきれなかったからだとの噂を漏れ聞き、妙に納得したことを記憶している。個人的な思い出話はここまでとし、高橋さんの千葉大学での貢献についていくつか述べてみたい。但し、研究業績そのも

のについては別欄で示されるので、ここではそれ以外の事柄について述べることにしたい。

高橋さんの専門分野は？と聞かれれば、とりあえずはギリシア哲学とりわけアリストテレスの哲学です、と答えても間違いではない。しかし上のエピソードからも推し量れるようにギリシア哲学の秀抜な研究成果を発表することに自足することなく、むしろそれからはみでる仕方で哲学的な議論を展開するところこそ高橋さんの真骨頂は見出せるであろう。別言すると、高橋さんは古代ギリシアにおいて形而上学のみならず自然学や政治学などありとあらゆる分野において刮目すべき著作を遺したアリストテレス当時の思考様式そのものを現代において継承しよう—もちろんそれが様々な部面で複雑化した現代にあっては無謀との誹りを受けることも覚悟のうえで—としていると思えるのである。高橋さんのそうした研究姿勢は、千葉大学に赴任したあと1991年9月から1993年8月まで海外研修に出かけられた高橋さんがその研修先として選んだのが、現代の英米哲学にあって意図や行為についての有力な考え方のひとつを打ち出していたStanford大学のBratman教授であったことから、その一端が垣間見えるであろう。

海外研修から帰国した高橋さんは、文学部と法経学部とが合同で進めていた大学院博士課程の設置計画に当初から携わり、狭い専門だけに縛られることのない幅広い視野と能力を身につけることが博士課程の院生にも要請されるような授業カリキュラムの策定に積極的に関わることになった。1995年4月に設置された大学院社会文化研究科（博士課程）ではそうした授業カリキュラムが導入され、その後大学院は2006年に修士課程も含めた5年一貫の大学院人文社会科学研究科へと改組されたが、そこでもそうした精神が継承されることになった。たとえ高橋さんご自身のようにとまではいかににしても、微細でありつつ俯瞰的でもある研究態度を院生に少しでも根づかせたいとの思いがここに体现されたのであった。言うまでもなく高橋さんはこれらの大学院で哲学を専攻する院生の教育・研究には指導教員として献身的に関わりつづけ、多くの博士号取得者を世に送り出してきた。そのうちの幾人かはすでに優秀な若手研究者として大学の常勤職に就いている。そのうえ高橋さんは大学院のみならず学部においてもとりわけ論文指導ではたしか

に非常に厳しいところがあったものの、学生や院生からは親しみをこめて「キューちゃん」の愛称でしばしば呼ばれるほどに慕われる存在であったことも付け加えておきたい。

高橋さんの活躍の場はまた単に文学部やその関連部局に限られていたわけではない。一例を挙げれば、同じ哲学講座の飯田亘之さん（現在は千葉大学名誉教授）が始められた全学部生対象の普遍教育での授業「先端技術と倫理」を2004年度から引き継いだのも高橋さんである。この授業は各分野の先端技術に関わる人たちを講師として招いて行なわれるオムニバス方式であったため、高橋さんは世話役としていろいろな苦労があったにもかかわらず、理系・文系を問わずすべての学生への倫理教育の重要性を痛感しておられたからこそ、苦労を厭わず長年にわたって担当されたのであった。この授業は学生にも好評であり、課題提出が頻繁に課されたにもかかわらず毎年100名以上の受講生がいるほどの人気のある授業であった。また2003年には看護学部が提出した「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点―実践知に基づく看護学の確立と展開―」という21世紀COEプログラムが文科省によって採択されたが、高橋さんはこのプログラムにも当初から倫理学担当として参加し、ケアの倫理を中心に隔年開講で博士課程の授業をずっと続けてこられた。これを受講した学生のひとりはずでに本学看護学部の教授として着任しているとのことである。高橋さんはこの他にも工学部で開講されている工学倫理でも毎年授業を行なうなど、いわゆる応用倫理学と称される分野の教育に熱心に取り組まれたのであった。

また学外の活動として特筆すべきことのひとつは2006年4月から2年間にわたり日本哲学会の事務局長として活躍されたことである。この間学会の日常的な会計事務を一括して処理する責任者であったばかりでなく、年に一度開催される大会運営を軌道に乗せるうえで中心的な役割を果たされ、なかでも2007年5月に千葉大学で開催された日本哲学会第66回大会の盛況はひとえに高橋さんの人徳のなすところであった。

退職後もアリストテレスの研究のみならず、現代哲学の中心的なテーマのひとつである（いやむしろ古代ギリシアから連綿と受け継がれてきたとも言える）倫理学における实在論論争について考えを纏めたいとのことである。

さらにはダンテの『神曲』やシェークスピアの諸作品を丹念に読解していくことを通して人間と世界、あるいは人間のなす社会についての考察を深めたいという目論見を懷いておられるとも伺っている。

退職後はお話しする機会もおそらく少なくなり、個人的には非常に寂しくなり残念ではあるが、瑣事から解放される高橋さんの今後ますますのご活躍とご健康をお祈りし、送る言葉としたい。

高橋久一郎先生 略歴

1953年 1 月 福島県郡山市に生まれる

学歴

1971年 3 月 福島県立安積高等学校卒業
1972年 4 月 東京大学教養学部文科二類入学
1978年 3 月 東京大学教養学部教養学科卒業
1978年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程入学
1985年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程単位取得満期退学

職歴

1987年 4 月 山形大学講師人文学部（哲学）
1988年 4 月 山形大学助教授人文学部（哲学）
1989年10月 千葉大学助教授文学部（哲学）文学研究科（修士課程）兼任
1991年 9 月 スタンフォード大学（アメリカ合衆国）客員研究員（1993年 8 月まで）
1995年 4 月 千葉大学大学院社会文化科学科（博士課程）兼任
1997年 8 月 千葉大学教授文学部（哲学）

非常勤講師（順不同）

駒澤大学文学部、中央大学文学部、放送大学、東邦大学理学部、東京理科大学理学部、東北大学文学部、東京大学教養学部、広島大学文学部、北海道大学文学部、東京大学文学部、南山大学文学部、九州大学文学部

所属学会（順不同）

哲学会、日本哲学会、日本西洋古典学会、東北哲学会、日本倫理学会

高橋久一郎先生 業績目録

- 1984 神話と対話——『メノン』における想起説の意義 東京大学文学部
哲学研究室『論集』II. pp. 136-148
- 1985 「知識」とは何でないか？ 東京大学文学部哲学研究室『論集』III. pp.
51-64
- 1985 (共著) 哲学理論の歴史 第12章「分析哲学」(pp. 295-315) 公論社
- 1985 アリストテレスの付帯的原因論 日本哲学会『哲学』35 pp. 108-118
- 1987 アリストテレスの「第一質料」論 日本哲学会『哲学』37 pp. 118-
128
- 1988 アリストテレスの表象論 山形大学紀要 (人文科学) 11 pp. 397-417
- 1988 プラトンにおける「学習と対話」 日本認知科学会『学習と対話』Vol.
88-2 pp. 38-43
- 1988 アリストテレスの「アクラシア」論 東北哲学会『東北哲学会年報』
4 pp. 1-13
- 1988 (共著) 西洋哲学の歴史 第1章「ギリシア哲学」(pp. 11-38) 公論社
- 1988 アリストテレスの「本意」論 哲学会『哲学雑誌』775 pp. 144-162
- 1989 「実践三段論法」の構造 日本西洋古典学会『西洋古典学研究』37
pp. 45-55
- 1990 (翻訳) J. パスモア『哲学の小さな学校』大島保彦との共訳 青土社
(Passmore, J., *Recent Philosophers*, Open Court. 1985) (改訂版)
ちくま学芸文庫 (2013) (総316頁)
- 1991 個体と形相 千葉大学文学部『人文研究』20 pp. 1-20
- 1991 ソクラテスと国家 創文社『創文』323 pp. 10-14
- 1991 プラトンにおける「学習と対話」 日本認知科学会『認知科学の発展』
4 pp. 133-149
- 1994 環境倫理は必要か？ 創文社『創文』362 pp. 6-9
- 1994 「世代間倫理」は必要か？ 千葉大学教養部倫理学教室『プラクティ
カルエティックス研究』pp. 214-221
- 1994 (翻訳と解説) ブラットマン『意図と行為』(Bratman, M., *Intention*,

- Plan, and Practical Reason*, Harvard U.P. 1987) 門脇俊介との共訳
産業図書 (総387頁) (解説 351-373頁)
- 1995 アリストテレスの理論的理性論 千葉大学文学部『人文研究』24 pp. 1-26
- 1995 遺伝子「治療」が問題なのではない 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究資料集』1 pp. 198-207
- 1995 環境倫理学は可能か? ——パート I 「環境経済学」「環境科学」の課題——千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究資料集』1 pp. 287-307
- 1995 アリストテレス『形而上学』は21世紀に生き残れるか? 哲学会『哲学雑誌』782 pp. 89-107
- 1996 医療における「先端技術」と「治療」の間 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究資料集』続編 pp. 82-98
- 1996 専門職の「倫理綱領」と制裁 電子情報通信学会『電子情報通信学会技術研究報告 (FACE96-1-5)』pp. 29-36
- 1996 アリストテレスの快樂論 千葉大学文学部『人文研究』25 pp. 1-30
- 1996 応用倫理学とは何なのか? 平成7年度科学研究費補助金・総合研究(A)課題番号06301005研究成果報告書『応用倫理学の新たな展開』(研究代表者 佐藤康邦) pp. 21-27
- 1996 (共著) 現代世界と倫理 「経済と倫理」(pp. 179-213) 晃洋書房(改訂版) 2002
- 1997 アリストテレスの友愛論 千葉大学文学部『人文研究』26 pp. 1-36
- 1997 「環境問題の倫理的解決と技術的解決」についての短いノート 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究』II pp. 42-44
- 1998 「責任論の基礎」のためのノート I 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究』III pp. 39-48
- 1999 「責任論の基礎」のためのノート II 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究』IV pp. 54-61
- 1999 責任と情報倫理 平成10年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)課題番号08451003研究成果報告書『境界問題の根』(研究代表者 藤本隆

- 志) pp. 25-36
- 1999 アリストテレスの目的論 千葉大学文学部『人文研究』28 pp. 11-42
- 1999 Why are we sometimes reluctant, and sometimes not, to see Information as Commodity? *Proceedings of The First International Workshop for Foundations of Information Ethics*, Kyoto University, pp. 44-49
- 2000 (単著) アリストテレスの「エネルゲイア」論の行為論としての現代的意義の研究 平成10年度科学研究費補助金一般研究(C)研究報告書 課題番号07610001 総頁数91頁
- 2000 「責任論の基礎」のためのノートⅢ 千葉大学『生命・環境・科学技術倫理学研究』V pp. 41-47
- 2000 「自立した主体」ということを責任論においてどう考えるか? 平成11年度科学研究費補助金・基盤研究(B(1))課題番号10410011研究成果報告書『倫理学のアカウンタビリティ』(研究代表者 鷺田清一) pp. 25-36
- 2000 (共編著) 応用倫理学の転換 ナカニシヤ出版 総頁274頁
- 2000 (共著) 情報倫理学 第7章 「「応用倫理学とは何なのか」と問う必要があるだろうか」(pp. 190-221) ナカニシヤ出版
- 2001 アリストテレスにおける「共同体」と正義 平成12年度科学研究費補助金・基盤研究(B(1))課題番号09410005研究成果報告書『対話と論争における合理性の起源と構造に関する研究』(研究代表者 天野正幸) pp. 42-73
- 2003 「仮想現実」に新たな哲学的・倫理的問題はあるか? 東北哲学会『東北哲学年報』17 pp. 49-56
- 2003 記憶としての倫理に向かって——アリストテレスの記憶論 哲学会『哲学雑誌』790 pp. 24-48
- 2003 (単著) アリストテレスの「エネルゲイア」論の心の哲学としての現代的意義の研究 平成12年度科学研究費補助金基盤研究(C(2))報告書 課題番号10610005 総頁100頁
- 2003 真理と生の技法の探求 哲学若手フォーラム『哲学の探究』第30号

pp. 17-30

- 2003 (共著) 情報倫理の構築 第2章「情報の倫理性と倫理の工学化」(pp. 39-76) 新世社
- 2004 (編著) 岩波応用倫理学講座 7 問い 岩波書店 総頁277頁
- 2005 (単著) アリストテレス——何が人間の行為を説明するのか? NHK 出版
- 2006 「倫理学の現実(リアリティ)——暫定総括」日本倫理学会『倫理学年報』第55集 pp. 239-249
- 2007 (単著) アリストテレスの「エネルゲイア」論の形而上学における現代的意義の研究 平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)報告書 課題番号16520007 総頁80頁
- 2007 アリストテレスの中庸論はどれほどバカげているのか? ギリシャ哲学セミナー『論集』第5集 pp. 1-21
- 2008 (共著) 岩波講座哲学 5 心・脳の哲学 第1章「魂の発見——いつ誰がどのようにして」岩波書店 (pp. 21-42)
- 2008 看護における価値観の問題『日本文化型看護学への序章』千葉大学大学院看護学研究科CEO報告書 pp. 141-146
- 2009 行為の理解と説明のために、なぜ「意図」が必要なのか? 人工知能学会『人工知能学会誌』Vol. 20-4 pp. 362-269
- 2012 脳死・臓器移植、そして尊厳死問題に寄せて 千葉大学『個体と権利』人社研研究プロジェクト報告書 243 pp. 1-13
- 2013 規範性と実在性 哲学若手フォーラム『哲学の探究』第40号 pp. 7-26
- 2014 私の身体が応答していないと思うことの不安 文化看護学会『文化看護学会誌』Vol. 6-1. pp. 52-54
- 2014 (監訳と解説) フィリッパ・フット『人間にとって善とは何か』(Foot, Ph., *Natural Goodness*, Oxford U.P, 2001) 筑摩書房 (総253頁) (解説219-244頁)
- 2014 (翻訳と解説) アリストテレス「分析論後書」『アリストテレス全集 2』岩波書店 (327-528頁) (解説575-608頁)
- 2015 アリストテレスの「友愛」論再考 哲学会『哲学雑誌』802号 pp. 25-45

- 2018 アリストテレスの『詩学（悲劇論）』における「行為」と「悪」の問題 千葉大学文学部『人文研究』47 pp.57-175